

湘南国際村散歩
Shonan Kokusaimura



①『めぐりの森』
農家のおじさんが轟トラでたたずむ、めぐりの森をめぐり、大楠山までハイキング!

②給水塔の上のイタリアン『Bellavista』
湘南国際村の高台の給水塔の上にある、それは眺めのいいイタリアンレストランです。三浦の野菜を使った「菜園風パスタ」が美味しいたまりません!

③カフェ『子安の里まりん』
名物はしらす丼ですが、この日はマグロ漬け丼を食べました。テラスで食事が出来ます。犬も一緒にですよ。

④『ROSSO Hayama』
オーガニックなストア&サロンで、日々の疲れを癒してみてはいかが?

⑤三浦野菜の直売所
え!ここか?と思いまや、湘南のシェフ達が買い出しに集う魅惑の直売所!旬には地デコや地ひじきも!

『ライフゆう』では
看護スタッフ・支援スタッフを募集しています。
社会福祉法人『みなと舎』の新しいチャレンジと一緒に参加しませんか?

問い合わせ

社会福祉法人 みなと舎

▼お問い合わせはこちらまで(担当:山本・森下)

神奈川県横須賀市芦名 2-8-17 TEL:046-855-3911 FAX:046-855-3912

ライフゆう 神奈川県横須賀市湘南国際村1-4-6 TEL:046-856-6833 FAX:046-856-6834

社会福祉法人 みなと舎

検索



みなと舎のフリーペーパー

Life ~命・暮らし・人生~

『ライフゆう』とともに生きる人々

<http://www.minato-yuu.or.jp>

TAMAGOMUSHI

たまごむし

VOL.04 2014 NOV



私が『ライフゆう』を選んだ理由

～メンバーさん、ご家族、看護師の“Life”から～

それぞれの『Life』が息づく場所

「安心して我が子を託せる場所がほしい」
ご家族の想いを受けて、
重症心身障害児(者)〔※〕の暮らしの場所『ライフゆう』が
オープンしてから半年が経ちました。

オープニングの慌ただしさを越え、
湘南国際村の現場では、
メンバーさんの“いつもの暮らし”が
少しずつ形作られてきています。

ここは、メンバーさん、ご家族、スタッフ、
その他『ライフゆう』に関わる人々の、
それぞれの“Life”が息づく場所。

それぞれのかけがえのない“命”が、
それぞれが大切にしたい“暮らし”が、
それぞれの想いが詰まった“人生”が、
日々脈々と営まれ、育まれています。

このフリーペーパー『Life』では、
そんな『ライフゆう』に関わる人々の
等身大の声や想い、生き様をお届けします。

今ここにある彼らの“Life”を、
あなたの心で、感じてみてください。

- 04 Member's Life / 飯干 朝菜さん
- 08 Family's Life / 飯干 美智代さん
- 10 Staff's Life 1 / 田中 有さん
- 14 Staff's Life 2 / 江川 美奈さん
- 18 ライフゆう's Life / “本人中心支援”とは？



※重症心身障害児(者)・重度重複障害児(者)について

重度の肢体不自由と重度の知的障害とが重複した状態にある方を重症心身障害児(者)。法律で定められた障害(盲、聾、知的障害、肢体不自由、病弱)を2つ以上併せ持ち、精神発達の遅れが著しい方を重度重複障害児(者)と呼び、日本にはおよそ3万8,000人(平成15年 愛知県調査を元に推定)いると言われています。

その原因は、出生前(先天性風疹症候群・脳奇形・染色体異常等)、出生時・新生児期(分娩異常・低出生体重児等)、周生期以後(脳炎などの外因性障害・てんかんなどの症候性障害)など様々ですが、医療の進歩により、かつては死亡していた例が救命できるようになつたため、重症心身障害児(者)・重度重複障害児(者)の数は増加傾向にあります。



Member's Life

ハワイアンのリズムに身を任せて。

今、ここにある私の暮らし。

ハワイアン音楽の流れる部屋で、アロハ柄のTシャツに身を包み、穏やかな表情でくつろぐキリリとした瞳が印象的な女性。彼女が、飯干朝菜さんです。ここでは、『ライフゆう』で暮らす朝菜さんの、1日の暮らしの様子を紹介します。夏の終わりを感じるある日、その日常の風景から、朝菜さんの目に映る景色や揺れる想いを感じてみてください。



1日の始まりはスキンケアから

「朝菜さん、おはようございます」。朝7時半、看護スタッフの呼びかける声で朝菜さんはパチリと目を開けました。昨夜から約9時間、ぐっすり眠ったせいか寝起きは良く、表情も穏やか。同じ『ハーブ』の部屋で過ごす4名の方々とも挨拶を交わし、清々しい1日の幕開けです。

朝一番の日課は、スキンケア。顔をきれいに拭いた後は、化粧水をつけてお肌を整えます。そして欠かせないのが、痰の吸引。人工呼吸器を付いている朝菜さんにとて、痰ががらんてしまうことは日常のことでありながら、放っておけない症状です。優しく目を見て話しかけながら、慣れた手つきで丁寧に処置をする看護スタッフの姿に、朝菜さんは安心した表情を見せていました。

8時になると、朝菜さんの部屋に美味しいそうな匂いが漂ってきました。お待ちかねの朝食の時間です。白い食器に映える色とりどりのメニューは、お粥もおかずも、全てペースト状。口から食事を摂ることができず、胃に直接注入する朝菜さんのために特別に仕立てられた食事です。食べるのが大好きな朝菜さん。ニコニコしながら

飯干朝菜さん

「ライフゆう」で過ごすメンバーさんのひとり。生後6ヶ月でヘルペスに感染し、重症心身障害児となる。養護学校卒業後、作業所「子どものへや」を経て18歳から「みなと舎」の通所施設「ゆう」へ通い、2014年6月に「ライフゆう」へ入所。現在35歳。

ら約30分かけて食事を終え、歯磨き、着替えを済ませたら、ホッと一息。今日は週3回の入浴も、通所施設『ゆう』へのお出かけも予定されていないので、ベッドに横たわり、ゆったりとした時間を過ごします。

家族との時間を大切に

「おはよう、朝菜。少し涼しくなったね」。聞き慣れた声を耳にし、うれしそうに瞬きをする朝菜さんの視線の先に映るのは、お母様の飯干美智代さん。毎日のように朝菜さんのものを訪れるお母様、「今日は少し眠そうね」と、朝菜さんといつものように、目で会話を始めました。朝菜さんはお母様の語りかけに、瞬きで答えるのだとか。お母様の元気そうな顔を見られて、朝菜さんもとても安心した様子です。

お昼前になると、看護スタッフが朝菜さんの元にやってきました。排痰を促す処置「パーカッション」の時間です。これは、12月に気管切開の手術を受けた朝菜さんにとて、欠かせない日課。「それまでは吸引だけだったのですが、この処置することによって、随分楽になりました」。お母様はそう言うと、穏やかな、でも真剣





な眼差しで、パーカッションを用いて呼吸ケアを行う朝菜さんの様子を見つめました。

12時半、お楽しみのランチタイムです。少し気分を変えて、車椅子に乗って部屋前の廊下で、仲間と一緒に昼食を楽しめます。今日のメニューは、鮭の西京焼、カリフラワーとキュウリのレモン和え、お

すまし、お粥。お母様が口元まで運んでくれた食器から漂う匂いを嗅いで、朝菜さんはニンマリと、うれしそうな表情。お母様と話をしながらのランチタイムは、朝菜さんにとって、毎日の楽しみになっているようです。

ハワイアンで 仲間とコミュニケーション

食後、歯磨きを済ませて部屋に戻ると、お母様は箱から、新しいCDラジカセを取り出しました。なんでも、古いラジカセが壊れてしまったので、お父様と一緒に選び、新調されたのだとか。「朝菜はハワイが大好きなので、ハワイアンをかけているんですよ」。お母様はそう言うと、ラジ

カセのスイッチをオン。スローテンポのハワイアンミュージックが流れ、朝菜さんはニコニコとうれしそうにお母様の方に目を向けていました。朝菜さんは、これまで4回もハワイに行くほどのハワイ好き。このハワイアンミュージックは、朝菜さんと同室のメンバーさんもお気に入りなのだとか。ゆったりとしたメロディが、仲間とのコミュニケーションをつないでくれているようです。

昼下がり、フロアで仲間とのおしゃべりを楽しんで部屋に戻ると、今度は『ライフゆう』の担当医が朝菜さんの元へやってきました。今日は、2週間に1度のカニューレ交換の日。朝菜さんの呼吸を助ける器具「カニューレ」を新しく取り替える、大事な処置です。「朝菜さん、呼吸も安定してきましたね」。穏やかな表情で語りかけながら処置をする先生に答えるように瞬きをする朝菜さん。この日は2時間ほど呼吸器を外しても体調が安定していて、心も身体も絶好調な様子です。みんなに囲まれて表情も豊かに過ごす毎日が、朝菜さんの体調にもいい影響を与えているかもしれません。

夕方、お母様がご自宅に戻られる前は、朝菜さんにとっての特別な時間。ニキビができやすい朝菜さんのために、お母様がお得意のスキンケアをしてくれます。顔を拭いて、化粧水をつけて、ときにはニキビ予防のためにパックもします。この日も、ケアの後はさっぱり、すっきりとした表情に。ツルツルのお肌に満足そうな様子で、お母様を見送ることができました。

続していく、いつもの暮らし

外出もなく、特別なイベントもない1日でしたが、にぎやかな『ライフゆう』にいると、あっという間。18時半には夕食を摂り、朝菜さんは自分のベッドへ。夜勤の看護師さんと会話したり、妹さんが飾ってくれたお気に入りのモビールを眺めたりしながら夜の時間を過ごし、22時にはスヤスヤと眠りにつきました。夜中、看護スタッフが痰の吸引に訪れてもほとんど目を覚ますことがないという朝菜さん。今日はどんな夢を見ているのでしょうか。

静かな夜を越え、朝日が昇る頃には、またにぎやかな『ライフゆう』が戻って来ます。そして朝菜さんの毎日の暮らしは、こうして、今日も続いているのです。



“入所させた”のではなく、“居場所をつくった”ということ。 お互いの良い人生のために、この場所があります。

「最初はやはり、親子ともども不安でした」と、入所当時の心境を語る飯干美智代さん。前ページに登場いただいた朝菜さんのお母様です。35年間、共に歩んできた朝菜さんとお母様にとって、暮らしの場である『ライフゆう』に入所するという決断は、簡単なものではなかったようです。『みなど舎』の通所施設『ゆう』に17年通い、『ライフゆう』のオープンと共に人生の大きな転機を迎えた飯干さんに、入所から約5ヶ月経った現在の心境を聞きました。

娘にとっての“ホーム”に

“飯干：先日、自宅で2泊過ごした後『ライフゆう』に戻ってきたとき、朝菜は「ふう」と、ホッとしたようなため息をついたんです。「帰ってきたー」という顔でした。もうこっちが朝菜にとっての“ホーム”になっているのかな、と思いました。”

と、笑う飯干さん。入所から5ヶ月、すっかり新しい暮らしに慣れた様子の朝菜さんを穏やかな顔で見つめます。でもやはり最初は朝菜さんの表情も堅く、飯干さんも離れて暮らすことに不安を感じていたのだと。その不安が解消されたのは、入所から約3週間のことでした。

“飯干：3週間ほど経って、明らかに娘は変わったんですよ。表情が和らいで、家

にいるときと同じような顔つきになってきて。4人部屋で、会話はなくても、仲間と生きていく楽しさを感じているように見えてきました。”

自立のために「居場所をつくる」という決断

飯干さんはもともと、「入所するのはもう少し先」と考えていました。7年前には家をリフォームし、朝菜さんの暮らしのスペースを整え、自宅での介護環境も万全に。50代はじめの飯干さんにとって、朝菜さんと一緒に暮らすことは、“当たり前”的のことでした。

“飯干：65歳くらいまでは自分が面倒みられるかな、という気持ちが漠然とありました。“親の義務”と思っていた訳では

ないのですが、それ以外は考えられなかったんですよね。でも、飯野さん（『みなど舎』の理事長）から、「自立」という言葉を聞いて。それまでは、いつか私の手を離れていくと思って育ててきていたので、障害がある娘が「自立」するなんて思いも寄りませんでした。”

初めて考えるようになった、朝菜さんの「自立」。そのとき、飯干さんの頭に真っ先に浮かんだのは、「信頼できる人に娘を託したい」という想いでした。飯干さんをはじめ、『ゆう』に通うメンバーさんのご家族の働きかけが大きな力となり、みなど舎が入所施設『ライフゆう』をオープンさせたのは、それから約2年後のこと。

“飯干：正直、こんなに早くできるとは思っていなかったので、親もちょっと躊躇した感じでした。「もう預けるの？」って（笑）。でも、今思うのは、「入所させた」ではなく、「娘の居場所をつくってあげられた」ということです。”

昔から入所施設は「親亡き後の居場所」と思われている方が多いと思いますが、そうではなくて、親がまだ元気なうちに居場所をつくってあげて、私も娘の嫁ぎ先に遊びに行くみたいな感覚で行き来できたらいいな、と思ったんですよね。だから「入所させてしまった」という後ろめたい気持ちはないです。”



6月には、3人目のお孫さんも誕生しました。

お互いの人生を生きること

『ライフゆう』で暮らす朝菜さんの様子を見て、当初の不安も解消されたと言う飯干さん。今は、ご自分の人生についても考えることができるようになったと言います。

“飯干：先日三女（朝菜さんの妹さん）が、「自分の人生を生きてほしい」というメールをくれました。今まで「自分の人生を生きる」なんて考えたことが無かったのですが、そのメールを見て涙が出ました。”

これからは、朝菜が『ライフゆう』に入ったことで、お互いが前向きになれるような生き方をしたいな、と思います。そして、入所をためらっている多くの親御さんに「お互いが良い人生を生きるためにこの場所がある」ということを、伝えたいですね。”



飯干さんは、これからの時間を趣味の手芸を習ったり、ご主人や娘さん（朝菜さんの2人の妹さん）との旅行や外出の時間に充てたりしたい、と聞かせてくれました。『ライフゆう』と共に始まった、飯干さんと朝菜さんのそれぞれの新たな人生。様々な人の“ライフ”を乗せて、『ライフゆう』は歩み続けているのです。



大切にしたいのは、効率よりも患者さんの生き様。
「本人中心」支援の現場で、実現したい想いがあります。

看護師になって5年目の田中有さん。救命救急センターや、がんセンターでの勤務を経て、現在は『ライフゆう』で看護スタッフとして働いています。田中さんが今ここで生きることを選んだ背景には、患者さん、そしてメンバーさんへの一貫した強い想いがあります。一度は諦めかけた信念を貫いて『ライフゆう』に辿り着いた田中さんの言葉から、『みなと舎』のスタッフに共通して流れる心の軸、そして、メンバーさんの生き様を感じ取ってみてください。

それって、メンバーさん中心？

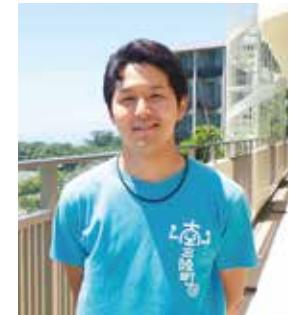
ある日の『ライフゆう』のこと。メンバーさんの歯ブラシ置き場が2つあることに、田中さんは疑問を感じました。口から食事を摂るメンバーさんと、口からではなく直接胃に注入するメンバーさん。それぞれに置き場を変えていたのは、「部屋

が近い方が忘れないだろう」という理由からでした。「それはスタッフの都合であって、メンバーさんのためではないし、障害の重さで区別したくないな」。そう感じた田中さんは、場所をひとつにすることを提案。スタッフの話し合いの結果、次の日から、みんな一緒に置き場に変えることになりました。



社会福祉法人みなと舎
ライフゆう
看護師 田中有 さん

看護師・『ライフゆう』常勤看護スタッフ。昭和大学保健医療学部看護学科卒業。大学病院の救命救急センター、がんセンターでの勤務を経て2014年4月より現職。大学生の頃より、重症心身障害者の子どもたちが参加するキャンプ(NPO法人『難病の子ども支援全国ネットワーク』主催)のボランティアスタッフとしての参加経験もある。



“田中：僕が看護師として大切にしたいと思っているのは、救命救急センターの師長に教わった「2.5人称の看護」という考え方です。1人称は患者さん、2人称はご家族。3人称はそれ以外の人。看護師は3人称に当たって、家族に成り代わることはできないのですが、他人としてではなく、家族のような気持ちで関わってみたい。そんな「2.5人称」の視点で看護にあたっていきたいと思い、いつも「自分の親だったら？兄弟だったら？」と考えながらケアをしてきました。

歯ブラシの置き場なんて些細なこと、と感じる方もいるでしょう。メンバーさんがこのことを気にすることもないかもしれません。でも、「一つひとつのことにつこだわりを持ってやっていきたい」と、田中さんは言います。田中さんがこだわるのは、「メンバーさん中心で考えているか？」ということ。システムありきで行動するのではなく、常に中心にはメンバーさんがいて、それに合わせるようなシステムをつくるという姿勢。『みなと舎』の「本人中心」の考え方方に深く共感してスタッフの一員となった田中さんの、強い信念が表れたエピソードです。

ジレンマの日々を乗り越えて

田中さんと『ライフゆう』の出会いは、オープン直前の2014年1月のこと。がんセンターでの勤務を辞め、次の職場を探していたとき、『ライフゆう』の見学に訪れました。それまで、大学病院の救命救急センター、がんセンターと、看護師としてのキャリアを積み重ねてきましたが、そこでは自分の看護観と一致しないジレンマを感じていたそうです。





でも救命救急センターでは、医療の技術的な知識など、すごく勉強になったのですが、命を救うことが最優先にされる職場で、「人を見ている」というよりは、「臓器を管理している」感覚がすごく強かったです。モニターを付けて数字を追いかけて、波形を管理して……。救命医療にとっては、それが大事なことだというは分かっていましたが、「この人の生き様ってなんだろう?」、「患者さんの心ってどこにあるんだろう?」、って疑問を抱いていました。

そして転職先として田中さんが選んだのは、がんセンター。「終末期のケアにゆっくり関わって看護を考えよう」という想いを胸に働き始めましたが、配属された病棟は、消化器内科。常に時間に追われ、患者さんよりも業務の効率を優先せざるを得ない現場に再びジレンマを抱え、「2.5人称の看護」を実現するのは無理なのだろうか……と、諦めにも似た気持

ちを抱いていたそうです。
そんな頃に見学に訪れた『ライフゆう』。ここで出会ったのが「パーソン・センター」という考え方でした。

“田中：日本語で言えば「本人中心」。理事長の飯野さんが、「まずメンバーさんを中心で物事を考えていきたい。システム・センターではなくパーソン・センターなんだよ」と仰っていて、業務中心ではなく患者さんの在り方や生き様を大切にする「2.5人称の看護」と同じものを感じました。僕もここでお世話になって、本人中心で組織を運営していくこと、看護をやっていくことがどういうことなのか学びたいと思い、「ここに賭けよう」と飛び込んでみました。”

こうして『ライフゆう』への転職を決意した田中さん。看護師5年目、これまでの医療現場から離れ、福祉の現場に身を置く、大きな決断でした。

「2.5人称」の実現を目指して

2014年4月、『ライフゆう』のオープニングスタッフとして働き始めて7ヶ月。冒頭でも触れた通り、常に「本人中心」を心の軸として行動し、新しい施設のシステムづくりにも積極的に参加している田中さんに、現在の心境を聞きました。

“田中：やはり全てゼロからのスタートなので、大変ですね。でも、何もないからこそ、メンバーさんを中心にした「パーソン・センター」の仕組みを作れるのかな、と思っています。歯ブラシの置き場ひとつにも、やっぱり意味がある。常に、「これはメンバーさん中心か？」と自問自答するようにしています。言いたいこともどんどん言える環境で、今すごくやりがいを感じていますし、ここに来てよかったですな、と思っています。”

『ライフゆう』で働くことをきっかけに、故郷の横浜から横須賀に引っ越した田中さん。まさに人生の転機を迎えた今、その目に映っているのは、やはりメンバーさんのこと。



“田中：今はとにかく、学びのとき。本人中心とはどういうことか、メンバーさんたちから教えてもらおうと思っています。まだオープンしたばかりなので、食べて、寝て、お風呂に入って……といった生活を実現するのに精一杯なのが現状です。でも、忙しいながらも、ひとつひとつ立ち止まって、他愛のない会話をオムツ交換も丁寧にやっていき、メンバーさんの生きがいや暮らしの楽しみを、メンバーさんと一緒に叶えていきたい。そして、「本人中心」支援の中で、「2.5人称の看護」の実現を目指していきたいな、と思います。”

一貫した想いを持ち続け、辿り着いた『ライフゆう』の現場に立つ田中さんの言葉に、もう迷いは感じられません。看護師として、ひとりの人間として。田中さんの人生の旅は、メンバーさんの人生と共に、これからも続いていきます。

ライフゆうの
ここが好き！



バイクでの通勤途中有る、
海の見える絶景ポイント。
見るだけで気持ちが晴れ晴れとします！



「応援します」の一言を心の支えに。
『ライフゆう』とともに、夢に向かって歩んでいます。

『ライフゆう』の看護スタッフとして働く江川美奈さん。江川さんの働き方は、ちょっと変わっています。普段は週5日勤務の常勤スタッフと同じように働いていますが、実は年に2回、2週間の長期休暇を取得しています。長期休暇の目的は、江川さんご自身が運営する、あるプログラムを実施すること。『ライフゆう』での仕事とバランスを取りながら、夢に向けて前進する江川さんの想い、そのライフスタイルをご紹介します。

社会福祉法人みなと舎
ライフゆう

看護師 江川 美奈 さん

看護師・「ライフゆう」常勤看護スタッフ。
昭和大学保健医療学部看護学科卒業。
手術室での勤務を経て、イルカ介在療法
を学ぶため渡米、2013年『ナイアドルфин
ヒーリングプログラム』を設立。同組織の代
表を務める傍ら、2014年5月より現職。障
害者のためのレスパイトケアのボランティア
スタッフとして、15年間の活動実績も持つ。
<http://www.naiadolfin.com>

Staff's
Life



オープン直後に長期休暇取得!?

『ライフゆう』がオープンして間もない2014年5月末、オープニングスタッフの江川さんは、2週間の休暇を取得して、ハワイの地にいました。障害のある人もない人も一緒にハワイの旅を楽しむ『ナイアドルфинヒーリングプログラム(以下、NDHP)』。江川さんは、その代表として、スタッフや参加者のみなさんと共にプログラムの指揮を取っていたのです。

「オープン間もない忙しい時期に長期休暇を取るなんて！」一般的な職場を知る方々からは、こんな言葉が聞こえてきそうです。でも看護師長の番場清美さんが出发前の江川さんにかけた言葉は、「イルカと写真撮ってきてね！」だったのだとか。他のスタッフの方も、恐縮する江川さんに「全然いいのよ、謝らなくて」と声をかけ、笑顔で江川さんを見送ったそうです。

“江川：普通は嫌な顔しますよね。でも休暇の申請をしたとき、番場さんには「あれで本当にいいの？2週間で足りるの？」と言われて。「えー！」って、びっくりしま

した。そんなこと普通は言ってもらえないですよね。”

江川さんは、契約上は、“週4.5日”勤務の看護スタッフ。通常は週5日の勤務をしていますが、就職前から、そのうち0.5日分をNDHPの活動のための年2回の長期休暇に充てることを申し出していました。そしてオープン直後の5月、ナースミーティングのときに番場さんはスタッフ全員の前で「いろいろな働き方を応援しているから、忙しい時期に休みを取る人がいても、それはお互い様です」と伝えていました。その一言で江川さんは休暇取得を言い出しやすくなり、心置きなくハワイツアーや運営に専念できました。そして2週間後、気持ちも新たに『ライフゆう』の現場に戻り、メンバーさんと向き合う生活を再開したのです。





NDHPでは、現在年2回のハワイツアーを実施中。『みなと舎』の通所施設『ゆう』のメンバーさんも参加しました。

10歳からの夢と、もう一つの想い

「イルカと泳ぎたい」。10歳のとき、テレビ番組でイルカと障害のある子どもが一緒に泳いでいるイルカセラピーの映像を目にして以来、江川さんは夢にこう書くようになりました。主に知的障害の方がイルカとの触れ合いの中で心を開いていく「イルカセラピー」。イルカに触った瞬間にパッと変わる表情に、子どもながらに感動を覚えた江川さんは、イルカセラピーの仕事に就くという夢に向かって一直線に進みます。大学で看護を学び、3年間の実務経験後、アメリカへ留学。その後、導かれるようにハワイへ行き、ビジネスを勉強して起業を決意。2013年、イルカセラピーのツアーを実施するNDHPを立ち上げました。

10歳からの夢を手にした江川さん。でも実はもうひとつ、抱き続けた想いがありました。それは、障害のある方のために看護師として働くこと。

“江川：ツアーには、参加される障害者の方に合わせて医師や看護師が同行しているのですが、私には看護師として役に立てるような知識と経験がありませんで

した。一人のナースとして動けるようになりたいと思いながらも、一度は諦めていたときに、1回目のツアーに参加してくださった『みなと舎』の方から看護師を探していることを聞きました。私のように海外に行ったり、勤務が不規則になっても、「障害の領域に興味があればいい」と言ってくださって。「私も良いでしょうか？」と、立候補しちゃいました。”

こうして、『ライフゆう』のオープニングスタッフとして働き始めた江川さん。プライベートでは不定期でシンクロナイズドスイミングのコーチも務め、多忙な毎日を送る現在の心境を聞きました。

“江川：「看護師として障害のある方々と向き合うための知識を習得する」という目標に向かって勉強ができているので、今の環境はすごく恵まれていると思って



います。私の働き方にも期待以上の配慮と理解をしてくださって、とても働きやすい。仕事はオープニングで忙しくて楽ではないですが、番場さんはいつも「応援してるから」と言って、みんなのいろいろな働き方を支えてくれるんです。みんなでがんばんなきゃな、って思っています。”

なんでも、『ライフゆう』には30通りもの働き方があるのだとか。通常では考え難いほどの多様な勤務形態に、メンバーさんだけではなく、スタッフの人生も支援する『ライフゆう』の姿勢を感じることができます。江川さんは、そんな『ライフゆう』と共に、これからも自分の選んだ人生を歩んで行くことでしょう。



ライフゆうの
ここが好き！



逗子駅からスタッフ専用のシャトルバスが
出ています。藤沢市から通っている私に
とってはとても便利で、助かっています！

メンバーサンもスタッフの人生を
応援しています！

看護師長 番場清美さん



江川さんの働き方は、『ライフゆう』では特別なことではありません。他にも、心理学を勉強中で毎年夏期講習のため10日間の長期休暇を取得する方、看護師として病院務めしながら月に数回、空いた時間で働く方、2人の子どもを育てながら、週1日4時間の勤務をする方、孫が生まれて2ヶ月間の長期休暇を取得する方……。みんなが“お互い様”的心でそれぞれの人生を応援しながら働いています。

そして、メンバーさんも、スタッフのみなさんの人生を応援しています。江川さんに対しては、「ハワイに行く時間を僕も応援してあげるよ。でも帰って来たら僕のために時間を使ってね」って、そういう目線で見ているはず。多様な働き方は、そんなメンバーさんの想いを反映したものなのです。だって、1日数時間でも働きに来てくれたなら、それはメンバーさんのためにになるのですから。

少しでも「働きたい」と思ってくれる方との出会いを大切にしたい、みんながみんなの人生の応援者でありたい。そんな想いで、スタッフのみなさんとの出会いを楽しんでいます。

みなと舎の“本人中心支援”とは?

例えば、「いつでも外出OK!」な体調を整えること。
暮らしを楽しむための医療ケアを目指しています。

『ライフゆう』は、メンバーさんが暮らしていく場所。ここで働く看護師の役割は、何かあったときに治療することはもちろんですが、日常的には、メンバーさんが、「やりたいときにやりたいことをするための体調を整えること」を大切に考えています。

メンバーさんによってそれぞれ状況は違いますが、例えば朝菜さんなら、いつでも外出できるようなスタンバイができる看護を目指します。「体調が良かったら外出しようね」ではなくて、本人が行きたい時にいつでも行けるような状態を保つてあげること。朝菜さんにとっても「私、いつでも行けるよ!」って言える方が、楽しいですよね。それが日常的な看護の役割だと思いますし、『ライフゆう』の目指す“本人中心”的看護の在り方です。

また、医療以外の日々の暮らしの中でも、メンバーさんにとって選択肢の多い方法を取ることを心がけています。例えば、お風呂は毎日、午前でも午後でも入れる体制にしています。それは、メンバーさんが外出したくなったらいつでも外出して、帰ってきたときにいつでも入浴できるようにするため。暮らし方を選ぶのは、スタッフではなくメンバーさん。やはり何事においても、中心にいるのはメンバーさんなのです。

現在はオープニング直後で、まだ完全な体制が整っていないのが現状です。でも、スタッフの目指す方向は、ただひとつ。焦らず、じっくりと、『ライフゆう』らしいメンバーさん中心の看護を実践していきたいと思います。

看護師長 番場清美さん

『みなと舎』が実践する“本人中心支援”。

このページでは、常にメンバーさんの暮らしを中心に据えた、『みなと舎』の看護の在り方をご紹介します。

効率重視ではなく、「メンバーさんにとって」を一番に考える丁寧な“本人 中心支援”を目指しています。



こだわり
1
お風呂の曜日・時間は
自由に選択可能

週3日の入浴は、メンバーさんの都合に合わせて、曜日と時間を自由に選択できるようになっています。例えば、外出したメンバーさんが、帰ってきていつでも入浴できるように。メンバーさんの「やりたい」を叶えるための方法です。



こだわり
2
できるだけベッドから
降りて過ごす

食事は車椅子に移動して、活動はリビングルームで、天気のいい日はベランダに出て。目指すのは、日中ベッドにだれもない状態です。



こだわり
3
日中のケアチェックは
別の場所で

メンバーさんのケアチェック(排泄のお手伝い)は、ケアルームやベッドに移動して行います。『ゆう』から続く、大切にしたい習慣です。

